第三講　演習問題(3)

つぎの文章は、『松浦宮物語』の一節である。遣唐副使として渡唐した橘氏忠は唐帝に厚遇され、その崩御後は、幼い新帝と政務を補佐するその母后に忠義をつくした。官職に就いている氏忠は、先例により本来は帰国できないが、両親の待つ日本に帰ることを切望するようになり、それを知った母后はその功績に報い、氏忠の帰国を決定した。別れの日が近づき、名残を惜しむ三人の様子を描いた以下の場面を読んで、後の問いに答えよ。

六月(みなづき)十日余りにもなりぬ。暑さ[1]ところせきころ、政(まつりごと)はてぬるに、ことに疎き人もさぶらはず。帝(みかど)、后(きさき)、少しうち休ませたまふとて、水に臨みたる廊の、風涼しきかたにおはしますに、召しあれば参りて、土廂(つちびさし)の石の上に[A]さぶらふ。

「(幼帝)思ひしことなれど、むげに残りなき日数こそ、いまさらに言ふかひなき心地すれ」と涙ぐませ[B]たまへる、いとかたじけなく忍びがたきに、后も近うおはします。六月十日余り、暑く耐へがたき日の気色(けしき)を、薄き衣も暑かはしう、思ひ悩まぬ人なきころの、まばゆきまでくまなき空の気色に、常よりことに言ふよしなき御さま、かたちの、光を放つと言ふばかり、目も驚く心地するに、いささか暑げなる御気色もなく、みどりの空に澄み昇る月の影ばかりきよく、くまなき御さま、「この世に[a]かかることやはあるべき」と、あさましう言ふ限りなきに、ただ仏の御国の心地のみして、[2]なめげなれど、「目し

ばらくも」とかや、恐れも忘れてうちまもらるるにつけて、思ひ分かず、涙のみぞすすみ出づる。いまはただ、このとまらぬ道の恨み、なほかへすがへすも忘れがたき志（こころざし）を、のたまはせやらず、みなしほたれおはします。

「（幼帝）ことのついでありて、*鄭衛（ていゑい）の声を好まねど、礼楽の道捨つべきにはあらねば、聞き合はせまほしかりつる物の音をだに、*金石糸竹（きんせきしちく）をなべてやめたるころにて、くちをしうも過ぎぬるかな。なほ早き月日の一巡りをだに、待ち過ごさざりつる恨みなむ、なにの深さも忘れぬべかりける」とのたまはすれど、深く思へるところを違（たが）へじの御掟（おきて）なれば、いとぞかひなき。「（幼帝）なほこの度は、*待つ人もあながちに深き志背（そむ）きがたければ、頼みがたきあだの命なれど、*かのふたりののちまで、おのづから長らふる身ならば、いま一度は、思ひ立たれなんや。かくながら、惜しみとどめたらむよりも、それや深き志のほど知られん」とのたまはする御兼ね言（かねごと）も、涙にむせびて、え[C]聞こえやらず。

（橘氏忠）限りあらむ命を更に惜しみても[b]君の御言（みこと）をいかが忘れむ

（幼帝）これゆゑぞ我も命の惜しまれむただなほざりに頼めおくとも

「（幼帝）さらば長らふる身ともがな」とのたまはする御気色も、いとおよすげて、[3]けうらにぞおはします。

（『松浦宮物語』より。文章を一部改変した〔↑注：入試問題そのままです〕）

注 ＊鄭衛の声 中国の春秋時代の鄭と衛という国の音楽を指す。人心を惑わすものとされていた。
＊金石糸竹をなべてやめたる 「金石糸竹」は音楽の意。先帝の崩御後、喪に服しているため、音楽をすべて禁止しているという意味。
＊待つ人 氏忠の帰国を待っている両親を指す。
＊かのふたりののち 「氏忠の両親の亡くなったあと」という意。

問一 傍線部１「ところせき」２「なめげなれど」３「けうらに」の本文中における意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選べ。

１ 「ところせき」
ア やっかいである　イ ぶり返す　ウ 過ごしやすい
エ 和らぐ　オ 連日続く

２ 「なめげなれど」
ア 呆然とするが　イ 清々しいが　ウ 落ち着かないが
エ 失礼であるが　オ ありがたい気持ちになるが

３ 「けうらに」
ア 美しくて　イ かわいらしく　ウ おとなびて
エ 聡明で　オ さびしそうで

問二　傍線部A「さぶらふ」B「たまへ」C「聞こえやら」の敬語の種類として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選べ。

ア　尊敬語　　イ　謙譲語　　ウ　丁寧語

A＝　　B＝　　C＝

問三　二重傍線部a「かかることやはあるべき」を現代語訳し、三十五字以内で解答欄に記せ。その際、「かかる」が何を指しているかを明確にすること。なお、読点や記号も一字と数える。

問四　波線部「いとぞかひなき」とあるが、なぜどうすることもできないのか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選べ。

ア　氏忠がいくら両親への思いを深くしても、先例により、すぐには帰国できないから。

イ　母后の、帝に対する愛情を尊重して定められた規則なので、臣下である氏忠には反論する余地はないから。

ウ　「氏忠と音楽が聴きたい」と帝が強く願っても、亡き父帝の喪に服する決まりに違反することはできないから。

エ　どれほど母后に恋い焦がれても、身分が違うので、氏忠の思いが叶うことは絶対にありえないから。

オ　氏忠の帰国は、彼の強い願いを汲んでそれに背くまいと、母后が取り計らわれたことだから。

問五　二重傍線部ｂ「君の御言」の内容として、最も適切なものをつぎの中から選べ。

ア　氏忠の功労は一生忘れないよ。
イ　再び唐に来ると決心なさらないか。
ウ　帰国について、もう一度考え直してください。
エ　帰国後は、以前のように、また両親に孝行をつくしておくれ。
オ　唐と日本に離れても、ともに長生きをし、互いに忘れないようにしましょう。

問六　『松浦宮物語』を著したとされている藤原定家は勅撰和歌集の撰者でもある。つぎの中から勅撰和歌集ではない歌集を一つ選べ。

ア　千載和歌集　　イ　後撰和歌集　　ウ　古今和歌集
エ　金槐和歌集　　オ　新古今和歌集

第三講

〈模範解答〉

問一　1ア　2エ　3ア

問二　Aイ　Bア　Cイ

問三　月が放つ光のように美しい人がいるだろうか、いや、いるはずがない。（三十二字）

問四　オ

問五　イ

問六　エ

〈現代語訳〉

六月十日過ぎにもなった。暑さがやっかいな頃、政務は終わったが、特に疎遠な人もお仕えしていない。帝と后は、少しお休みになるというので、水に面した回廊の、風が涼しく吹くところにいらっしゃるが、お呼びがあったので（氏忠は）参上して、土廂の石の上にお控えする。帝は、「（以前から）分かっていたことであるが、ひどく残すところのない日数が、今改めて言いようがない気持ちがする」と涙ぐみなさったのが、とてももったいなく（涙を）こらえかねていると、后も近くにお出ましになる。六月十日過ぎ、暑く堪えがたい日の様子を、薄い衣も暑苦しく、思い悩まない人もいない頃の、まばゆいほど曇りのない空の様子に、普段よりも特に言いようのないご容姿、ご容貌が、光を発するというぐらい、目も覚める気持ちがして、少しも暑そうなご様子もなく、青空に澄み昇る月の光ほどに清らかに、曇りのないご様子は、「この世にこのように美しい人がおられることがあろうか」と、驚きあきれて言葉で言いようもないが、まるで仏の御国にいるような気持ちばかりがして、失礼であるが、「目を瞬時も（離さない）」とか言うように、恐れ多さも忘れてついじっと見てしまうにつけて、思慮分別も忘れて、涙ばかりがひとりでに流れ出る。今はただ、この留めようのない（氏忠の帰国の）旅への恨めしさ、それでもやはり本

当に忘れ難い忠誠の念を、言い終わりもなさらず、皆涙を流していらっしゃる。

帝は、「物事には順序があって、（私は）鄭衛の音楽を好まないが、礼儀、音楽の道理は放置してよいことではないので、（そなたと）一緒に聞きたかった音楽をさえ、喪に服しているため音楽をすべて禁止しているころで、残念なことに（音楽とは無縁で）過ぎてしまったよ。それでもやはり早く月日が（過ぎて）一巡するのをさえ、待って過ごしてくれなかった恨めしさは、（そなたの）どんな気持ちの深さも忘れてしまいそうだよ」とおっしゃるけれども、（氏忠が）深く願っていることに背くまいとの（母后の）ご決定なので、本当にどうしようもない。「やはり今度の帰国は、氏忠の帰国を待つ両親もひたむきに深い愛情を寄せていて背きがたいので（そのまま帰国するとして）、頼りにならないはかない命ではあるが、氏忠の両親が亡くなったあとまで、たまたま生きながらえる身であるならば、もう一度、（唐に来ると）決心なさらないか。このままで、別れを惜しんで引き留めているよりも、その方が深い誠意の程が知れよう」とおっしゃるお約束の言葉も、涙にのどを詰まらせて、お返事を申し上げきれない。

限りあらむ…＝寿命の定まっている命をさらに惜しんでも、（もう一度唐に来いとの）帝のお言葉をどうして忘れましょうか。

これゆゑぞ…＝そなたの言葉ゆえに私も命が惜しまれるだろう。ただたとえいいかげんな約束だとしても。

帝が、「それでは、お互い長生きの身でありたいことよ」とおっしゃるご様子も、とても大人びて、美しくていらっしゃる。